

2020年8月25日

中央大学ライティング・ラボ 2020年度前期活動報告書

抄録

2020年度前期はCovid-19の感染拡大に伴う遠隔授業の実施にあわせ、ライティング・ラボも5月末より遠隔セッションを実施した。今期初の試みであったものの、遠隔セッションの提供で、緊急事態下でもラボの機能を果たすことができた。遠隔セッションの課題も見つかったが、対面セッションにはない良さも発見でき、ラボの新機能を見出すよいきっかけにもなった。なお、セッション数は129件、稼働率は49.4%であった（I-3）。

遠隔セッションにおいては、以下の課題が挙げられる。まず、遠隔セッションスキルの向上である。的確なセッション目標の設定、学生主体となるセッションの進行など、チューターのセッションスキルに遠隔ゆえの新たな課題が見られた。次に、IT技術面における課題である。インターネット環境やIT技術の問題により、チューター学生共にやりたいことができないという状況が時々生じた。最後に設置数に関する課題である。対面セッションよりも長いセッション時間が必要となるため、セッション設置数の調整が必要となることである。後期は卒論・修論シーズンとなり、セッション希望が増加すると思われるため、繁忙期の対応を検討する必要がある。

以上の課題が生まれた遠隔セッション実施ではあったが、同時に遠隔セッションによる良さも見出すことができた。webex上の機能を有効活用することでグループワークに協働をもたらす、情報不足の新生に安心できる場を提供する等ラボの新しい役割を見出すこともできた。

対面セッションの代替として遠隔セッションを提供するのにとどまらず、新しいラボの役割、新しいセッション方法を模索していくのが来学期の課題である。

以 上

はじめに

2020年度前期におけるライティング・ラボの活動状況について、以下の通り報告する。
Ⅰでは開室状況と利用実績、Ⅱではセッション以外の活動、Ⅲでは来期にむけて特筆すべき所見を述べる。

Ⅰ 開室状況と利用実績

Ⅰ-1 開室期間と日数、チューター配置数

開室期間：2020年5月25日から2020年7月23日までの月曜・火曜・水曜・木曜

開室日数：36日（前年度56日）

設置セッション数：261コマ（前年度768コマ）

スーパーバイザー（SV）：中野玲子

アシリエイト・スーパーバイザー（ASV）：峰尾菜生子

シニア・チューター2名

チューター9名（一人当たり3～8コマ担当）

Ⅰ-2 受付方針（2020年度前期）

受付優先順位および予約の可否は、文章の種類（対象文章かそれ以外か）に基づく。

1. 対象文章

授業で課題となったレポート及び発表レジュメ、卒業論文、修士論文、博士論文、
投稿論文、プレゼンテーション原稿（スライド用・口頭用）、研究計画書、ボランテ
ィアセンター報告書、総合政策部プロジェクト活動報告書

2. 空きがある場合につき、受け付ける文章（例年は予約不可）

奨学金応募書類に含まれる志望動機書

留学志望書

公務員試験練習課題

そのほか、アカデミック・ライティングの観点でコメントできそうな文章

外国語／日本語翻訳（授業の課題のみ）

3. 受付不可とする文章

就職活動関係の文章（キャリアセンターへ案内）

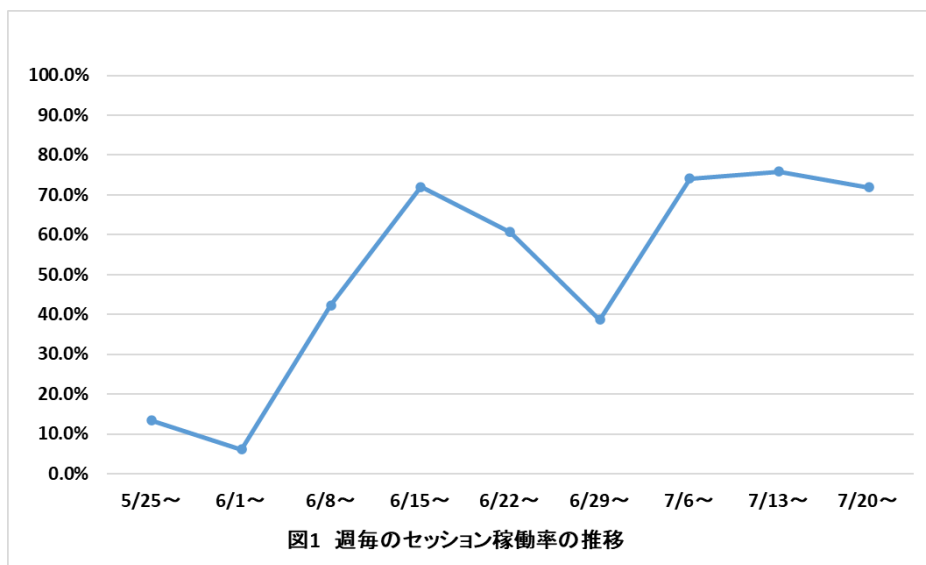
メールや手紙の文章

公務員試験以外の筆記試験対策のための相談

I-3 実施セッション数と稼働率

実施セッション数：129件（前年度564件）¹

セッション稼働率：49.4%（前年度稼働率73.4%）



【所見】

今年度の実施セッション数は、昨年度の2割程度であった。セッション稼働率も50%に満たなかった。実施セッション数の減少と稼働率の低下の要因として、主に以下の3点が挙げられる。第一に、今年度は授業期間の延期および遠隔セッションの準備のため、通常よりも約1か月半遅れて5月下旬からの開室となったためである。第二に、webexを利用して遠隔でセッションを行うという特性上、セッション数を制限せざるを得なかったためである。第三に、各種ガイダンスの中止・変更やオンライン授業により、広報活動が十分に行えなかったためである。以上のような要因により、セッション実施数、稼働率ともに昨年度より大幅に減少したと考えられる。

しかしながら、週別の推移をみると、6月中旬頃より稼働率が上昇している。稼働率上昇の要因として、遠隔ワンポイント講座を実施したこと、学期中間のレポートを課す授業が多いことが考えられる。7月に入ってから稼働率が70%程度になり、100%を超える日もあった。ライティング・ラボの遠隔セッションが認知されてきたこと、くり返し利用する学生がいること、学期末のレポート課題が出されたことが要因として考えられる。

曜日別にみると、週の初めの月曜日と週の終わりの木曜日の利用が多い。週半ばは授業が多いためと、週末にまとまって作業をする学生が多いためであると推測される。後期は卒業論文や修士論文の相談が増えて稼働率が上昇すると考えられるため、早い段階からの利用や火曜日・水曜日の利用を呼びかけていきたい。

¹ 開始期間の短縮、遠隔セッションへの対応のため、実施セッション数は前年比22.9%に減少した。

I-4 利用学生の内訳²

*利用学生数（延べ）³

2020年度前期合計 129名（前年度 564名）

*利用学生の所属

法学研究科	3名
経済学研究科	0名
商学研究科	0名
文学研究科	13名
総合政策研究科	0名
法学部	30名
経済学部	20名
商学部	3名
文学部	44名
総合政策学部	15名
国際経営学部	0名
理工学部	1名

*利用学生の学年

学部1年	66名
学部2年	8名
学部3年	11名
学部4年	18名
学部5年以上	11名
博士課程前期／修士	1名
博士課程後期	14名

I-5 相談文章の種類

卒業論文・修士論文・博士論文	9件
授業のレポート	86件
投稿論文	12件
研究計画書	15件
授業の発表資料	6件

² 今年度は利用学生が留学生かどうかはたずねていないため、日本人学生と留学生の内訳は記載しない。

³ 延べ利用数。実施セッション数に基づくため、同一学生の同一日利用および連続セッションを含む。

学会で発表予定の発表資料 1件

【所見】

利用学生の所属内訳からは、特に文学部・文学研究科の利用が多いことがわかる。利用者の少ない学部や研究科の利用促進に向けて、広報活動に力を入れるとともにニーズを探っていきたい。遠隔セッションであったため、理工学部の学生の利用もあった。多摩キャンパス以外の学生も利用できるよう、今後は遠隔セッションの拡大を検討する必要がある。

学年の内訳をみると、利用者のおよそ半数が学部1年生であった。相談文章の種類は授業レポートが約7割であった。例年通りの傾向ではあるが、オンライン授業でレポート課題が増加しており、特に新入生にとってはライティング・ラボが貴重な相談機関となっていることがうかがえる。4年生以上の学生は、卒業論文の相談に加えて、大学院入試のための研究計画書の相談も10件以上あった。大学の入構が制限されるもとの、教員や大学院生に相談する機会が減少しているため、ライティング・ラボでのセッションが大学院の様子を知る貴重な機会となったといえる。今後も、学術的文章作成に対するアドバイスを通して、学生が安心して大学生活を送れるよう支援していきたい。

I-6 遠隔セッションに対するチューターの評価⁴

前期の業務を振り返って業務を改善するため、遠隔セッションに関してチューターアンケートを実施した。各質問項目と結果は以下の通りである。

1. オンラインセッションでやりにくかったことや困ったこと

遠隔セッションにおける主な困難として、「対応におけるタイムロス」「メモの取りにくさ」「利用学生の反応を把握することの難しさ」「事前の文章診断による問題」「通信や音声の不調」「機器の使いにくさ」が挙げられていた。

2. オンラインセッションでやりやすかったことや良かったこと

遠隔セッションにおける主なメリットとして、「利用学生の緊張緩和」「利用学生との共同作業のしやすさ」「移動する必要がないこと」「印刷の手間がないこと」が挙げられていた。

3. オンラインセッションでは、どのような理由で延長になりやすかったか

遠隔セッションでは、全体的にセッションが延長する傾向にあった。延長の主な理由として、「機器の操作に時間がかかるため」「通常よりもゆっくりしたペースでセッションを行ったため」「通常よりも多くの質問を受けたため」「セッションにおける優先順位をつけるのが難しかったため」「時間経過が把握しづらいため」といった点が挙げられていた。

⁴ 今年度はセッション時の煩雑さを避けるため、利用学生へのアンケートは実施しなかった。

【所見】

アンケートから、遠隔セッションにおける主な困難として、(1)機器の操作上の問題でタイムロスや通信・音声の不調が発生する、(2)利用学生の反応がつかみづらい、といった点があることがわかる。

一方で、(1)在宅のため、チューターの移動の負担軽減や利用学生の緊張緩和につながる、(2)利用学生に作業してもらいやすいといった遠隔セッションのメリットも少なくないことがわかる。

機器の操作については、連絡用のファイルを作成し、チューター間で文章の共有方法の工夫などを情報共有しながら次第に慣れていった。後期は前期よりも遠隔セッションに慣れた状態で開室ができるため、セッション技術が向上することが期待される。

アンケートから、利用学生にとってもチューターにとっても遠隔セッションにはさまざまなメリットがあることがうかがえる。Covid-19の感染状況によらず、遠隔セッションを常時設けることも検討すべきである。

II セッション以外の活動

II-1 遠隔セッション準備

II-1-1 在宅業務管理方法

遠隔セッションはSV、ASV、チューター、学生すべてが在宅で実施した。セッション管理として、SVまたはASVが常時オンライン上で待機し、トラブル対応を行った。

II-1-2 資料及び臨時HP作成

遠隔セッション実施に向け、4・5月に以下の準備を実施した。

- ① 遠隔セッションマニュアル
- ② セッション時配信資料
- ③ 臨時HP

II-1-3 資料共有方法確立

遠隔セッションでは、オンラインアプリの Drop Box を利用して、文章等を共有した。なお、個人情報保護のため、それぞれの文書にはすべてパスワードによる鍵をかけて保管した。

【所見】

緊急時対応として遠隔セッション準備を開始したが、どのような状況下でも学習支援を継続する工夫、著作権への配慮等にチューターという立場で能動的にかかわれたという点が、チューターへのキャリア形成支援の一環に繋がったと言えよう。来学期は、遠隔でより良いセッションを実施するための工夫を通して、

さらなるキャリア形成支援へと繋げていきたい。

II-2 宣伝

II-2-1 授業へのオンラインガイダンス

全教員へ向け、オンラインによるガイダンスの実施を告知したが、申込は1件にとどまった。オンラインガイダンスでラボを知り、その後利用した学生が数名いたことから、学生への情報送達方法としてオンラインガイダンスは有効であると考えられる。来学期も継続して実施する。

*出張ガイダンス 1件

II-2-2 遠隔ワンポイント講座

ラボの宣伝を目的として、例年6月末に学部生向けワークショップを2日開催しているが、今学期はワークショップは中止とした。代替として、遠隔ワンポイント講座をSVおよびASVで実施した。実施概要は次の通りである。

開催目的：ラボの遠隔セッションの周知及びラボの宣伝

日時：プレ開催	5月22日(金) ⁵	12:40-13:10	(参加60名)
第1回	6月5日(金)	12:40-13:10	(参加約60名)
	6月9日(火) ⁶	17:00-17:30	(参加約100名)
第2回	6月12日(金)	12:40-13:10	(参加約70名)
	6月16日(火)	17:00-17:30	(参加約55名)
第3回	6月19日(金)	12:40-13:10	(参加約55名)
	6月23日(火)	17:00-17:30	(参加約40名)

内容：第1回	序論・本論・結論の書き方
第2回	パラグラフの作り方
第3回	引用の仕方

アンケート⁷結果：

プレ	25名分回収	内とても有益だった11名	有益だった14名
第1回	72名分回収	内とても有益だった39名	有益だった33名

⁵ 5月22日は、文学部の心理学・英文学専攻の新生対象にパイロットとして実施した。

⁶ 同一回内は火曜日と金曜日の講座内容は同一。

⁷ グーグルフォームを用いて、講座の最後に実施した。

第2回	56名分回収	内とても有益だった37名	有益だった17名
		あまり有益ではなかった2名	
第3回	38名分回収	内とても有益だった27名	有益だった14名

【所見】

オンラインガイダンスは依頼数が少なく宣伝効果は見られなかった。来学期は教員への遠隔セッションの周知を徹底していきたい。ワンポイント講座については、今学期は課題がレポート形式となった授業が多く、参加者も多かった。今後もラボの宣伝とともに、新入生の不安解消のきっかけとして新入生のニーズにあわせたワークショップを何等かの形式で継続開催していく。

II-3 その他チューター業務

- ① 事例集作り
- ② 配信資料作り
- ③ 新人チューター研修実施

II-4 中央大学杉並高等学校へのチューター派遣中止

今学期は、Covid-19 感染拡大に伴い高校派遣も中止とした。来学期の対応については別途検討を行う。

II-5 学振道場中止

昨年度同様の開催を予定していたが、Covid-19の感染拡大に伴い中止とした。

III 来期に向けた所見

III-1 チューター公募

今期同様、来期もチューター不足が見込まれる。安定したラボの運営のため、今学期も公募を実施する。公募では、第二次選考を従来とは異なり遠隔で実施する。

III-2 チューター業務

新たに浮かび上がった遠隔業務特有の課題の中から、来期検討する課題を以下に記す。

- ① チューター同士の接触機会の確保
- ② 遠隔特有のセッションスキルの向上

III-3 来学期の遠隔セッション運営について

今学期はセッションの延長が多く、セッション設置数を減らして対応したが、来学期は卒論・修論執筆シーズンとなり、設置数の確保が重要となってくる。繁忙期においては、

チューターに負担をかけずにセッションの質を維持するため、学生にはラボの早めの利用を呼び掛ける、修論提出前の開室日時を検討するなどできる工夫をしていく。

以上

2020年8月25日

スーパーバイザー 中野玲子

アソシエイト・スーパーバイザー 峰尾菜生子